様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２８４８

研究課題名（和文）古代難波地域像の再構築－近世絵図資料と中世史料の検討を通して－

研究課題名（英文）Reconstruction of the image of the ancient Naniwa area

研究代表者
西本　昌弘（NISHIMOTO, Masahiro）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：００１９２６９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　まず難波地域を描いた近世絵図を検討して、古代に遡る地名や地形のデータを収集した。次に中世史料を検討して、古代寺社や古代地名に関する記載を収集した。さらに難波津の位置をめぐる研究史を追跡し、解決への糸口を探った。
　収集データを利用しながら、行基が摂津国西成郡津守村に建立した寺院について検討した。善源院は現在の都島区善源寺町に創建された寺院、難波度院は難波大渡に置かれた寺院で、のちの渡邉地域（現在の天神橋付近）に所在したと考えられる。枚松院はかつての福島区平松町に所在した寺院である。以上の行基寺院はすべて淀川（大川）以北の天満砂堆に所在したことになり、この地域の重要性が高まることになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　古代の大阪地域史に関しては、かつて『大阪府史』や『新修大阪市史』が刊行されて、最新の歴史研究の成果がまとめられた。しかし、そうした成果のなかには江戸時代以来の誤った認識を継承したものも多く、改めて現在の地点から批判的な研究を再構成する必要があった。本研究ではそうした認識の下、古くからの通念に囚われず、実証的・批判的な観点から古代大阪地域像を再検証した。その結果、現在の梅田地域を含む天満砂堆の周辺が、古代においても先進地域であり、官衙や離宮・寺院の多く置かれた場所であったことが確認できた。こうした成果は前近代の大阪地域像を見直すことに寄与するであろう。

研究成果の概要（英文）：　Firstly, I examined modern maps depicting the Naniwa area, and gathered data on place names and terrain dating back to the ancient times. Secondly, I examined medieval historical materials and gathered information on ancient temple and shrine. Thirdly, I tracked the history of research to the Showa period, where we examined the location of Naniwa-du, and searched for clues to the solution.
　Using the data collected in this study, I examined the temple built by Gyoki at Tsumori Village, Nishinari district of Settsu County. It is thought that Zengenji is the temple established in the current city of Zengennji, the Naniwa Watarinoin temple was a temple located in Naniwa Owatari, located in the later Watanabe area (near the current Tenjinbashi). Hiramatuin temple is a temple located in Hiramatsu-cho, Fukushima-ku. All of the above rows and temples were located in Temma sandbanks north of the Yodo River (Okawa), which increased the importance of this area.

研究分野：日本古代史

キーワード：古代難波　難波津　中世史料　近世絵図資料　森幸安　西成郡津守村　行基寺院

１．研究開始当初の背景

⑴　西本は 2005～09 年に関西大学なにわ大阪文化遺産学研究センター研究員（歴史資料遺産班リーダー）として、古代難波地域の古代史を再検討する作業を行ってきた。この間、『豊中市史』や『高砂市史』を執筆し、大阪湾岸の古代史に関する知識を深めた。その後、2013～14 年度には関西大学研究拠点形成支援経費を受けて、研究代表者として共同研究「難波・飛鳥・京都の歴史遺産の発掘と活用」を実施した。10 年近く難波地域の研究を進めてきた結果、平安時代における難波地域の研究が手薄であることを確認し、古代・中世の文献史料を再発掘して、これらに関する研究を口頭報告し、また論考を執筆した。

⑵　幸い大阪歴史博物館や大阪文化財研究所による共同研究の成果により、上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要が次第に明らかになり、2014 年３月にその成果が公表された。最近発表の新成果は、従来にない視点から難波の古代・中世史を再構成することを可能にするものである。以上のような動向を踏まえて、古代難波の地域像を根本的に見直す必要があると考えた。具体的には、難波地域の地理的復原と中世史料の再検討により、５世紀以来、国家的外港および経済・流通の拠点であった難波地域の豊かな歴史を掘り起こすことを目指す。

２．研究の目的

古代の難波地域は、政治・経済・交通の要地として発展してきた重要拠点であった。しかし、長岡・平安遷都を機に、９世紀以降、難波地域の都市機能は衰退していったという通説に規定されて、平安時代以降の難波地域に関する研究は近年まで低調であった。しかし近年、申請者は考古学的成果や文献史料の掘り起こしにより、こうした通説に異論を唱えている。ただし古代史料だけでは限界があるので、難波地域に関する近世絵図資料を読解して古代･中世に遡る地名･地形を復原し、中世史料（とくに仏教史料・聖経史料）に遺存する古代地名・古代寺社名を検討することにより、現在の研究の隘路を突破する手がかりを得ることができると考える。折しも、大阪歴史博物館を中心とする共同研究によって、難波地域の新たな古地理変遷図が提示された。この好機を捉えて、古代難波の地域像に再検討を加え、中世・近世に繋げる作業を行いたい。

３．研究の方法

⑴　大阪市内では近代以降の開発により、小字を含めた地名の消滅が著しい。また、河川改良や埋め立てにより、海岸部の地形が大きく変わっており、古代・中世の地形を復原することが困難である。こうした難点を克服するために、歴史地理学者の大阪湾岸復原研究の他、国立公文書館所蔵の森幸安作成『日本輿地図』中の「大坂分町地図」や「摂州大坂旧地図」など、近世の絵図史料を集成して検討を加え、古代・中世に遡る歴史情報を読み取ることで、この地域の歴史像を復原する手がかりを得たい。

⑵難波地域史研究は古代史だけでは手詰まり感があるが、考古学の積山洋や中世史の大村拓生の研究によって、新たな可能性を示しつつある。そこで大村の研究などを参照しながら、中世史料（とくに寺社史料や聖経史料）を網羅的に再検討することで、中世史料のなかに古代難波地域像を復原する手がかりを捜索することにしたい。

４．研究成果

本研究では第一に、難波地域に関する近世絵図資料や近代地図を解読することで、古代に遡る地名や地形に関するデータを収集することに努めた。第二に、中世史料を検討して、古代寺社や古代地名に関する手がかりを発掘することを試みた。第三に、江戸時代から昭和戦後期に至る難波津の位置をめぐる研究史を追跡し、解決への手がかりを探った。収集したデータを利用して行った研究によって、以下のような成果が得られた。

⑴　古代難波津の位置をめぐる研究史について、江戸時代から昭和戦後期に至るまでの流れを振り返った。

江戸時代には、敷津・高津・難波津を三津と称すとか、難波津は難波地域の港津の総称であるなどと考えられていたが、こうした見方には具体的な論拠がある訳ではなく、当時の難波津は大坂市中をさす総称であったことに引きずられた解釈ではないかと思われる。明治期以降には、住吉津と大伴津を難波津と称したといい、昭和期に入ると、南から住吉津・大伴津・渡辺津が存在したと考えられるようになった。ただし、難波津が本当に総称であったのかどうかについては、『古事記』『日本書紀』などと『万葉集』などの歌謡文献とを弁別しながら分析する必要があるだろう。

難波津の中心となる三津（御津）は三津寺町にあったとする見方が江戸時代以来定着してきたが、一九世紀の交には御津を大川沿岸に求める説が出現した。明治期以降も難波津＝三津寺町説が多数を占めたが、天坊幸彦・大井重二郎によって難波津（大伴の三津）を大川沿いの渡辺地域に比定する見解が唱えられ、これが昭和戦後期の天坊・山根徳太郎説に継承されていった。難波津＝大川沿岸説に対しては、三津寺町説に立つ瀧川政次郎が精力的な批判を行っており、議論の分岐点はほぼ明らかにされた感がある。瀧川らが俎上に載せた『続日本紀』天平勝宝五年九月条や『江家次第』斎宮帰京次第、三所祓などの記事を丹念に検証してゆくことが、問題を解決に導く上で不可欠の作業であることは間

違いない。
　難波大郡・小郡や難波館などの位置も、難波津の位置と関わる重要な論点であるが、江戸時代には大郡を東生郡、小郡を西成郡の古称とみる説が通説化していたので、難波館を東生郡内の玉造周辺、安国寺坂上、真田山近辺の字唐居殿などに求める見方が定着し、安曇寺の位置も安堂寺町説が長く受け継がれてきた。しかし、早く『摂津名所図会大成』や幸田成友が注目し、戦後に山根徳太郎や瀧川政次郎がそれを継承したように、「摂州渡辺安曇寺」と明記する安祥寺鐘銘の史料的価値は高く、安曇寺は大川沿岸の渡辺地域に存在したと考えるべきである。安曇寺＝安堂寺町説と同様、難波館を安国寺坂上や唐居殿に求める説は、何ら確証を伴わない地名転訛説にすぎず、大郡＝東生郡説、小郡＝西成郡説と同様、根本的に考え直す必要があろう。
　古代難波津に関する研究は、1960 年にいたるまで以上のような成果と課題を残し、その後の研究に受け継がれてゆくのである。

⑵　『行基年譜』の記載をもとに、摂津国西城郡津守村に所在した善源院・枚松院などの行基寺院について、研究史を追いながら検討した。その要点は次の通りである。
　善源院（川堀院）・同尼院は現在の大阪市都島区善源寺町に創建された寺院で、古代・中世には西成郡に所属したが、近世に淀川（大川）の流路が変化したことで、東生郡に所属することになった。津守村がこの付近まで広がっていたとみることを疑問視し、善源院は本来あった場所から都島区に移転したとみるむきもあるが、善源院が川堀院とも称されたことや、行基が菩提僊那を善源院に迎えた際に、河水に造花二千を浮かべたという伝えからも、善源院は当初から現在の善源寺町の場所に建てられたと判断できる。
　難波度院は難波大渡（難波渡・葉済・柏済）に置かれた寺院で、のちの渡辺地域に所在したと考えられる。渡辺は現在の天神橋付近に想定されており、行基はここに堀江橋を架けたと思われるので、この堀江橋の北詰めに難波度院があったのであろう。古代難波における交通・流通の中枢であったこの地には、度布施屋も設けられていた。延暦二年に駅家が設けられたのち、この地は津守村から分立して駅家郷となったと考えられる。
　枚松院はかつての福島区平松町に所在した寺院であり、現在の福島区玉川一丁目・二丁目付近に比定できる。古代には淀川河口部の低湿地であったと思われるが、近くには行基が開削した白鷺嶋堀川もあることから、すでに人々が居住して、航行や漁撈の活動を行っていたことが推定される。
　作蓋部院の所在地は不明であるが、『摂津志』などの説を認めるとすると、これも天満砂堆に存在した可能性が高い。
　以上のように考えて大過ないとすると、行基が津守村に設置した寺院はすべて淀川（大川）以北の天満砂堆に所在したということになる。奈良時代の津守村は淀川河口部だけではなく、天満砂堆全体の広い範囲を包含していたと考えられるのである。平安時代になると、この広い津守村のなかから、讃楊郷と駅家郷が分立し、その領域を狭めた津守郷が存続することになるのであろう。
　現在の大阪駅北方には西成郡の主要農地が存在していたが、明治一九年測量の「大阪実測図」では当時の大阪（梅田）停車場の南に接して「字住ノ江」の小字が認められる。山根徳太郎氏は津守村の存在を住吉大神の最初の祭祀地と関わらせて理解したが、大阪駅の南に接して「住ノ江」の小字が残されている事実は、天満砂堆の地こそが住吉大神と深い由縁をもつところで、そこに津守村が広がっていたことを示すものといえよう。大越勝秋氏は西成郡の地に多くの条里坪名が残されていることを指摘するが、それらは現在の大阪駅の北方から西方に広がっている。条里坪名の遺存は古代・中世における農地開発の一つの目安であり、天満砂堆や淀川河口部が低湿地ではあったが、農業や漁撈などの活動の場であったことを物語っている。
　大阪市域の行基寺院は西成郡に集中しており、とくに津守村が難波における行基の活動の拠点であった。行基が御津村に二院、津守村に三院を設けるのは、大仏造営の勧進を命じられた翌年のことであり、古くから国家的な港湾・渡河施設が存在した難波御津・難波大渡の地に、行基が寺院や布施屋を置くことが許されたのは、大仏造営という国家的大事業の推進役に行基が起用されたことと深く関わるであろう。
　古代の西成郡津守村が天満砂堆に比定できるとすると、この地域の重要性がこれまで以上に高まることになろう。国家的な渡河施設である難波大渡（のちの渡辺）を前面に擁し、背面に長柄船瀬を控える天満砂堆の歴史的位置は、今後さらに検討を深めるべき課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①<u>西本昌弘</u>、昆陽寺鐘銘の基礎的検討、地域研究いたみ、査読有、47 号、2018、1-30

②<u>西本昌弘</u>、古代難波津の位置をめぐる研究史(1)、　関西大学文学論集、査読無、66 巻 4 号、2017、25-50

③<u>西本昌弘</u>、皇子・皇女の殯宮の場所、日本歴史、査読有、827 号、2017、1-18

④<u>西本昌弘</u>、平城宮西宮再考、古代史の研究、査読無、19 号、2015、1-20

〔学会発表〕（計４件）
①西本昌弘　「国風文化を考える」コメント、日本史研究会例会、京都大学、2017 年

②西本昌弘、東アジアから見た「国風文化」、第 61 回国際東方学者会議東京会議、日本教育会館、2016 年

③西本昌弘、日本に来た吐火羅人・舎衛人と度羅楽（吐羅楽）、「歴史と文化：アジア史の中野日本古代史」国際シンポジウム、中国・清華大学、2015 年

④西本昌弘、シンポジウム「摂関期の国家と社会」コメント、史学会 第 113 回大会、東京大学、2015 年

〔図書〕（計５件）
①西本昌弘　他、思文閣出版、古代寺院史の研究、2019 年、1-512

②西本昌弘　他、勉誠出版、宗教と儀礼の東アジア―交錯する儒教・仏教・道教―（アジア遊学 206）、2017、1-245

③西本昌弘　他、思文閣出版、日本的時空間の形成、2017、1-608

④西本昌弘　他、岩波書店、岩波講座日本歴史 第５巻、2015、1-350

⑤西本昌弘　他、勉誠出版、日本古代の「漢」と「和」―嵯峨朝の文学から考える―（アジア遊学 188）、2015、1-234

６．研究組織
(1)研究代表者
西本　昌弘（NISHIMOTO,Masahiro）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：００１９２６９１